

アメリカ児童図書館黎明期に 子どもの文学普及に貢献した人々(8) ～メイ・マッシー④～ 金山愛子

はじめに

アメリカ絵本の黄金時代創出に寄与したヴァイキング社の編集者メイ・マッシー (May Masee, 1882-1966)には、出版した数多くの絵本や物語が日本に翻訳されたことに加えて、日本との間に人的つながりがある。太平洋戦争の前後に日本とアメリカの間を行き来した二人の人物がいた。アメリカで活躍した日本人画家の八島太郎(1908-1994)と上皇陛下の皇太子時代の家庭教師であったエリザベス・グレイ・ヴァイニング(Elizabeth Gray Vining, 1902-1999)である。本稿では八島太郎の絵本の主題とアメリカでの受容と評価について考察し、次にヴァイニングの作品に見られる価値観および民主主義社会と子どもの本に関するマッシーと共通する考え方を探る。子どもの文学が描く人間の尊厳について考えたい。

1. 八島太郎について

八島太郎(本名・岩松惇(あつし)、後に淳(じゅん)と改名)は、1908年、鹿児島県大島半島の肝属(きもつき)郡小根占(こねじめ)村(現・南大隅町)の医師岩松親愛(ちかよし)の三男として生まれた。¹⁾寒村の裕福な家庭の子どもとして、淳は元気なガキ大将であったようだ。その後軍国主義下の日本において、東京美術学校(現・東京芸大)での軍国教育に抵抗し除名となり、プロレタリアアートに関わり、妻の新井光子(本名・笹子智江、後に絵本作家・八島光)と共に特高に検挙され壮絶な拷問を受ける。光が身重であったこともあり、二人は転向して釈放される。

心身ともに傷つき疲弊しきった二人は、光の生家笹子家の庇護のもと快復していく。神戸の山の手の瀟洒な家の並びにあった笹子家はクリスチャンホームであり、自由で開放的な雰囲気があった。太郎にとっても居心地が良かったようだが、光はいつまでも実家の世話になることを潔しとせず、まもなく太郎と家を出た。光はかつて父が仕事上、自分の友達の親を含む従業員を解雇せねばならなかった事情から、父に対して心を閉ざしていた。その庇護と経済的な支援を享受しつつも、ブルジョア

的生活を送ることへの後ろめたさや反発もあったと思われる。二人は絵を教えるなどして生計を立てていたが、苦しい生活だった。やがて光の父笹子謹(ひとし)の勧めで、光の義兄の便宜により1939年、5歳になった息子の信(以下マコ)を光の実家に預けて二人は渡米する。日中戦争勃発後のことである。

ニューヨークに着くと二人は貪るように絵の勉強に没頭し、太郎はアート・スチューデントズ・リーグに入学する。風刺画などを描いていたが、太平洋戦争開戦後は、OWI(米戦時情報局)やOSS(米戦略情報局)に入り、日本兵に降伏を訴えるビラや新聞の作成やラジオ番組の配信を担当した。日本兵にはとにかく「死ぬな」「生き抜け」と伝えた。その一方で、「転向したアカ」として日本人共産黨員コミュニティでは受け入れられず、アメリカ軍スパイとの嫌疑をかけられることも頻繁にあり、日本人から絵を買うアメリカ人もおらず、食べるにも困る生活だった。1943年、自らの体験に基づき日本の軍国主義を批判した*The New Sun* (Holt, 1943, 『新しき太陽』中央社1949, 『あたらしい太陽』晶文社1978)を出版するにあたり、故国に残っていた息子に危害が及ぶことを怖れて、日本を表す古語「大八洲(おおやしま)」と典型的な男子の名前「太郎」をとり「八島太郎」を筆名とした。

1948年長女桃子(以下モモ)が生まれ、15歳になったマコをアメリカに呼び寄せ、10年ぶりに一家は一つ屋根の下に暮らす。八島は、幼いモモのために自分の幼少期の愉しみを伝える絵本制作を思い立ち、*The Village Tree* (1953, 『村の樹』白泉社1983)から始めて、*Plenty to Watch* (1954, 光と合作、マコ岩松訳『道草いっぱい』創風社1998)、*Crow Boy* (1955, 『からすたろう』偕成社1979)、*Umbrella* (1958, 『あまがさ』福音館書店1963)、*Momo's Kitten* (1961, 光と合作『モモの子ねこ』岩崎書店1981)、*Youngest One* (1962未邦訳)、*Seashore Story* (1967, 『海浜物語』白泉社1983)をすべてヴァイキング社から出す。『からすたろう』、『あまがさ』、『海浜物語』の三作は、コールデコット賞次席となっている。こうして八島太郎は、アメリカ絵本作家の中で存在感を増していった。

2. 八島太郎の作品とその評価

次に、アメリカにおける八島の絵本作品の評価を検証し、八島自身はどのような思いで絵本や子どもを見ていたのかを彼自身の言葉により跡付けたい。『あたらしい太陽』や*Horizon is Calling* (Holt, 1947, 『水平

線はまねく』晶文社1979)という自伝的作品で名前を知られていた八島は、『村の樹』をヴァイキング社に持ち込み、編集者メイ・マッシーとアートディレクターのモリス・コールマンに出会う(いわさきちひろ絵本美術館19)。少年たちにパンツをはかせることを条件に即座に受け入れられたようであるが(宇佐美 246)、マッシー側の八島太郎に関する記述は極めて少ない。至光社の武市八十雄は、「呼吸の合うエディターと出会うことは、伴侶を見つけるよりも難しい。彼女と会えたことはアーティストとして幸運だった」「編集者としての威厳のある端座の中には、愛すべき児童たちの無垢の魂が同存しているようであった」との八島の発言を記録している。²⁾八島の作風は「激しく暴力的」で「しばしばがむしゃらで、荒っぽくサディスティック」と『ニューヨークタイムズ』では評されているが(Yagusch 252)、マッシーはこの画家を採用した。多くの図書館員や書店員が「外国の物語」と思われるものに抵抗し、多くのアメリカの若者が、外国の人々へ想像力や共感を向けることをしなかった時代に、彼女は大胆なもの、美しいものを良しとし、移民画家の描く外国のものを積極的に採用していたのである(Vining 1979, viii)。こうして八島は、マッシーが1920年代から起用していた移民アーティスト達の仲間入りをした。

八島の絵本が出版された1950年代のアメリカはどのような状況だったのだろうか。編集者のエリザベス・マッケルダリー (Elizabeth McElderry) は1950年代を「多様性に充ちた時代で子どもの本は時代の変化を映し出していた」が、他方で*The Two Reds* (Harcourt, 1950 『ふたりのあか毛』童話館 2001)を出版した際に、社会には共産主義への過剰な恐怖があることを身に沁みて感じたと言う(McElderry 89)。出版界においては、一般的に編集者は社会的な変化に鈍感で、マイノリティグループに意識が向いていなかったとも述べている(McElderry 91)。

それでは八島太郎の作品はどのようにしてアメリカで受け入れられ、どのように評価されていたのだろうか。八島の作品については、『ホーンブック』誌の“Artist's Choice”で、画家のニコラス・モードヴィノフ(Nicholas Mordvinoff)が『からすたろう』を挙げている他(Mordvinoff 1956)、バーバラ・ベーダー (Barbara Bader)がその著書で8ページも割いて八島を紹介している(Bader 443-450)。

ベーダーは、『村の樹』にはストーリーはないが、コマ割りの漫画風スケッチ、広がる風景画と一枚の静物画でできている絵で注釈された年代記であると紹介する。舞台となった日本の村について知ることでもできる

が、このような遊びは、アメリカの川でもできる川遊びであり、八島の特徴は、「ヴィジョンの強さ」(the intensity of vision)にあるとする(446)。中沢啓作の言う「生の本能」(34)とでも言うべきものか。異国の子どもの遊びの風物詩の紹介というよりは、朝から晩まで遊びに興じる少年時代が村の穏やかな風景と好対照をなして描かれる中で、子どもの遊びへの集中力の激しさが伝わってくる。

ストーリー性が加わって絵本らしくなったのが『からすたろう』である。学校になじめず内にこもるチビが感じたり見たり、興味をもつものを八島は描いて見せる。ペーダーは、八島の特徴としてセザンヌのように輪郭線をほとんど使わずに、内から外へと描く技法を指摘し、もしかしたら、彼が描く対象のメタファーかも知れないと分析する(446)。

6年生でイソベ先生が担任になった時、チビはよき理解者を得る。先生はチビの話を聞き、チビの自然に関する豊富な知識を同級生に披露する。学芸会で、チビはさまざまなからすの鳴き声のまねをして、皆の感動と悔悟の涙を引き起こす。卒業式では、チビはただ一人皆勤賞で表彰される。チビは毎朝早くに家を出て日暮れに帰り着くまでの道のりで、からすの声を聞き分け、どんな気持ちで鳴いているかを知り、まねすることができたのだ。イソベ先生の簡潔な説明は、聞いている子ども達の心を動かし、チビをいじめていた自分自身の姿を顧みるのに十分だった。イラストレーションに比重のある絵本の作りで無駄のないテキストが生きる場面である。かつて八島は「マッシー女史は文章にうるさい」と話していたが、初期の文章は彼女の指示により磨きがかけられたのかも知れない。

Then Mr. Isobe explained how Chibi had learned those calls—
leaving his home for school at dawn,
and arriving home at sunset,
every day for six long years.

Every one of us cried, thinking how much we had been wrong
to Chibi all these long years. (*Crow Boy*)

チビはその後「チビ」とは呼ばれず「からすたろう」と呼ばれるようになり、学校を卒業して炭を売る姿が描かれる。チビの尊厳の獲得の物語として読める。

『ホーンブック』誌の“Artist's Choice”で『からすたろう』を取り上げた

画家のニコラス・モードヴィノフは、ロシア人であったが、ロシア革命の折に家族でフランスへ逃れる。パリ大学を卒業後に、13年間南大西洋の島々で生活するというユニークな人生経験がある人だ。渡米後にウィリアム・リップキンド(William Ripkind)と出した『ふたりのあか毛』³⁾のタイトルに「アカ」の文字が入っていたがために、赤狩りの厳しい時代、意図せぬ論争を引き起こした(Hopkins 205-209)。これはマッケルダリーが語っていることと符合する。このような経歴の持ち主が、『からすたろう』に認めたのは、大胆な表現主義とユーモア、東洋的な繊細さと詩的な調子、そして次のような点である。

黒を除けば基本3色だけで、プリズムのすべての色彩が一印象派の明るい光と日本画を思わせる洗練された優雅さが融合して、画面を満たしている。(中略)限定的な技法の枠内でも彼の想像力の充溢が表現され、彼が自由でのびのびとした表現者であること、そして、私が何よりも賞賛する資質、すなわち真摯さを兼ね備えた画家であることを示している。(Mordvinoff 430)

モードヴィノフの言う「真摯さ」は、ニューヨーク公共図書館のアン・キャロル・ムーアもメイ・マッシーも等しく子どもの本に求めた特質である。

しかし、絵だけで「真摯さ」を伝えるのは困難であり、よいテキストがその役割を果たすことになる。石井桃子は、『からすたろう』を描き終えたばかりの八島からそのストーリーを聞き、幸福感を抱いたと述べている(石井 68)。

それまでの彼の絵本は、私には、まだ骨だけのような気がしてならなかった。「絵の本」ではあるかもしれないが、「絵本」になるには、もう少しストーリーの肉づけがいる、と、私には思われた。『烏太郎』の話聞いたとき、私は、日本にも絵本作家ができた、と思った。

子どもの絵本というものは、じつにむずかしい。絵と文は一体になって、一つのものをつくりあげなければならない。語感があり、ストーリーをつくりあげる作家(文を書く力)があっても一じつは、これだけでも、たいへんむずかしい仕事だが—そのことばやストーリーの思い、陰影を全部くみとって、絵にあらわしてくれる画家を見つけることが、またたいへんな仕事である。(石井 68-69)

彼の絵本が「まだ骨だけ」という印象は、ベーダーの『村の樹』についての批評と同様のものであろう。石井は『あまがさ』についても、『からすたろう』で強く打ち出したストーリー性が希薄になったと評している。八島はそれを認めようとしなかったようである(70-71)。石井は、「これは、太郎さんがあくまでも、絵に就き、私は文にとらわれているという、二人の考え方のちがいの問題だったろう」(71)と議論を打ち切っている。

イソベ先生のモデルは八島の小学校時代の二人の恩師(磯長武雄、上田三芳)であり、⁴⁾八島は、この本を光、モモと磯長先生に捧げている。八島は戦後1962年に帰郷し、小学校時代の友人を訪ね歩いた時の模様を映画*Taro Yashima's Golden Village* (『金色の村』)に撮っている。⁵⁾その時チビのモデルになった同級生に会おうとしたが妻が亡くなったばかりだからという理由で拒否され、傷ついたという(宇佐美 257)。チビのモデル、トミゾウは両手を広げて、ガキ大将だった太郎に会いたいとは思わなかったのかもしれない。八島はトミゾウに会えずに帰る時に、「トミゾウは私が『からすたろう』を出版したことも、子どもの頃、トミゾウが好きだったことも知らないものな」と寂しそうに語った(Yagusch 257)。

ここでチビについて考察したい。チビのモデルには三人いるという。一人はこのトミゾウであり、もう一人は橋から落ちて死んでしまった学友であった(宇佐美 252)。それでは三人目はだれか? 村上由見子は『鳥太郎』は、八島太郎自身の姿だった、と思う人は多い。私もそうだと思っていた。だが、事実は違い、少年期の八島太郎はいわば、チビを無視し、からかった側にいた。だからこそ、描けたのかもしれない、と知った今ではそう思う」と述べている(58)。『からすたろう』のテキストが途中から“We”という主語で語られていることから、太郎が学友の側にいたように思わせる。だがしかし、私は八島がチビに自分自身を投影していたと考える。その理由は、彼がいじめられて孤独な子ども時代を過ごしたからというのではない。大人になった太郎は、「自分の一生はコンプレックスの連続だった」と宇佐美に告白している(108)。陽気で強引でいながら、内面ではコンプレックスが強く、画家としてなかなか認められなかった八島自身の内面がチビに投影されているとは考えられないだろうか。八島は自分自身のことを次のようにも語る。

人はわたしのことを陽気で情熱的で、人生と芸術に対して肯定的だと思っているけれど、そういう気分じゃないときは、姿を隠してい

るんだ。ゆっくり休むことも、庭で木や花を相手に戯れることも好きだよ。自分のことは傷病兵だと考えている。(Hopkins 323)

八島は『からすたろう』で、チビの内面を示唆する要素を落としてしまったことに気づき、それがあつたならば物語の演劇性がずっと高められたのにと後悔している(八島 1973, 57〈4〉)。「たとえば、主人公のからすたろうの心は悲しみに充ちていたので、いつでも出そうと思う時には涙をこぼすことができた。そして、その涙を透かして、空の太陽や神棚の燈明に向って目を細めたり見開いたりして工夫すると、七色に燦然たる奇蹟が千変万化の姿を現出するのであつた」(岩崎ちひろ美術館 8)と書き加えたかつたようである。しかし、このような記述はかえってセンチメンタルな調子を作中に持ち込み、ストーリーのテンポにブレーキをかけただろう。チビが心情を語らずとも黒板の文字や生徒の顔がにじんで見えるように寄り目にするを描くことで彼の心情は十分に伝わる。さらに、チビの書いた書や絵をイソベ先生は教室の後ろに貼り出すが、書道の中に「作太郎」という文字が連続して書かれているものがある。この文字の連続は、見ようによっては「太郎作」と読める。作者の遊びだろうが、これも二人を結びつけるヒントであると考えれば、八島がチビに自己を投影していたと考えられる。チビにとってのからすの鳴きまねは、八島にとっての絵であり絵本という表現だつたのではないか。炭売りに来たからすたろうが山に帰る時に聞こえる明るいからすの鳴き声に読者は救われる思いがする。

情に厚い八島太郎ではあつたが、いささか自己中心的で人の気持ちに鈍感なところがあつたかもしれない。伝記作者で幼い頃笹子家と親しく、太郎や光から絵を習っていた宇佐美承の父親は、八島を「いなか侍」と評しているが(161)、この表現は彼の本質を言い得ているように思える。1945年にアメリカの「戦略爆撃調査団」の一員として来日した八島が故郷の同級生を訪問したがつた時に、「やめた方がいい」とアドバイスした友人もいた。宇佐美は八島と話した父親が、「影がなさすぎる、あぶない。(中略)いま、民主化運動とかいうものがはじまっているが、それはまだ少数だ。政府はいまだに国体護持なんていってやがる。戦争中にアメリカに協力した人間を尊敬する国民がいまなん人もいると思うか」と声高に言ったことを回想している(24-25)。敗戦国の日本人が、アメリカ軍の「手先」となつて働いた八島を喜んで迎えようはずがあるまいという訳である。多くを失つた者達にとって自分がどう見えるかを考えよ

と、八島の想像力の欠如を指摘したのであろう。

他方で、八島太郎の子どもへの愛情の深さ、ふるさとへの郷愁の深さを見過ごすことはできない。絵本に向かう資質とも言えるものが彼の中に内在していたと考えられる。『からすたろう』がコールデコット賞次席の榮譽に輝いた時、八島は子どもの頃から自分より幼い子ども達が好きで、ニヒルになった青年時代ですら、子ども達に対して否定的感情を持つことはなかったと述べている(Yashima 1955, 21)。日中戦争の間、男たちがどんどん遺骨となって帰って来ていた時代、召集令状を待つ八島は、当然のことながら生への執着を感じる。それは人間に惹きつけられていたからだと言う。同時に、自分がこれまでキャンパスに描いてきたものの意味が、耐えられないほど浅薄なものだと思ったり、絵筆を取ることができなくなった(Yashima 1955, 21-24)。しかし、転機が訪れる。

ある日、市内電車のなかで、一人の中年の男がうちの息子とおなじ五歳くらいの男児といっしょにいるのが目につきました。わたしとおなじように召集令状を待っていて、息子との時間を一秒たりとも無駄にしたくないようでした。息子の膝坊主を両掌でかぶせて、父子が体温をかよわせるような恰好をしていました。

わたしは、人体の意味にこのように感動したことはなかったし、むろん、自分の画布にも反映させたことはありませんでした。

もう一度ふりだしから再出発し、西洋の巨匠たちがいかに自分の理解を表現したかを研究したいと思いました。(八島 1972, 56〈3〉, 74-75)

これが渡米につながっていく。とは言え、八島が絵本制作に着手するまで渡米後15年近くかかっている。八島が子どもの絵本に向かうにはモモの存在が大きかった。胃潰瘍を患う八島が胃痛に顔をしかめるたびに、2歳のモモは、顔に自分の頬をこすりつけるのだった。「病気になることがなかったら、こんな優しい人間性がこんなによるべない幼児のなかにひそんでいるのを知ることはなかったでありますよ」と語る八島は、「この小さな生命に感謝し、この娘に何かいい物語を与えたい」と思ったのである(八島 1972, 56〈3〉, 76)。こうしてできたのが、『村の樹』であり、『道草いっぱい』である。これらは自分の楽しかった少年時代を思い起こして描いたものである。それに『からすたろう』が続く。これら

日本を舞台にした作品がメイ・マッシーの眼を引いたのは、異国情緒以上に、普遍的な人間性が描かれ、つましい生活をしている子どもたちにも自然や村の日々の営みが織りなす宝物のような時間や場面があり、子ども達はその恵みを身体いっぱい享受する姿―「生の本能」であり「集中力の激しさ」―を表現しているからであろう。それと同時に、風変わりで仲間外れにされるような子どもにも、自然と感応する感性があり尊い人間性があることが伝えられている。それをモードヴィノフは「真摯さ」と呼び、「卓越した絵本」として『からすたろう』を選んだのである。

ヤグシュは、『からすたろう』が最もよく同時代の日本を描いていると評価している(254)。それまでアメリカで出版されていた日本を描いた絵本は、差しさわりなくニュートラルですべて日本の過去を扱ったものであったのに対し(Yagusch 315-6)、八島らは、実際の戦争や収容所生活の実体験に基づき、絵本を描いた。彼らは自国の文化に深く根ざしながらも、アメリカの一部となろうとして、勇敢な生き方を描き、強く読者に訴える絵本作りをしたと評している(Yagusch 248)。

娘のモモの成長を描いた『あまがさ』は、石井の言うようにストーリーの緊密さと展開力には欠けるが、青と赤の色調とオノマトペを多用した音のハーモニーが印象的な絵本である。実際に大人になったモモが読む雨音はリズムカルで、おそらく父親がこのように読んでいたのだろうと推察される。⁶⁾子どもが何か新しい道具を手に入れた喜びとともに、自立への淡い喜びが五感を通して伝えられる。モモを育てた太郎と光は、子どもがいかに絵本の中の出来事を、身体性を伴ってリアルに感じるかを見逃さなかった。例えば、光の実家から送られてきた『舌切り雀』の絵本のおばあさんの残虐さがどうしても許せず、また大きなつづらから出てきた化け物が恐ろしくて、モモがマヨネーズをかけて本を封印してしまったことや、『ふしぎの国のアリス』を読んであげると、アリスが自分の涙の池で溺れそうになる場面で、絵本に向かって必死で「ストップ、ストップ!」と叫ぶモモの姿を述懐している(八島 1961.2 (4), 58-63)。雨傘を使う待ち遠しさと願いが叶う日の喜びに伴う予期せぬ緊張と自立への誇りは、子どもをよく見ていればこそ形にできたものであろう。絵に出てくる女の子は光や成人したモモと同じ眼をしたアジア系の子どもである。マイノリティとされている子ども達の中にも、自立への誇りがあることが描かれている。『あまがさ』は『からすたろう』に比べて読者の感情に訴える力は弱くても、子どもの普遍的な感受性、そして子どもの尊厳を描いた作品として広く受け入れられたと考えられる。

八島作品の特徴は「郷愁」と「子どもの人間性(ヒューマニティ)」と言える。英語しか話さない子どもを抱えて生活していくためにアメリカに残った八島(瀬田 300)が、久しぶりに訪れた日本で浦島太郎と自分を重ね合わせたことは容易に想像できる。そんな浦島の物語を扱った『海浜物語』はゴールドデコット賞次席を獲得したものの、筋立ての面で「日本版リップ・ヴァン・ウィンクル」と言えばわかるかもしれないが、「浦島太郎」の物語を知らない読者にはわかりにくい。さらに、絵は物語を語る力が弱く、ストーリー展開の希薄な構成となっているところに難があると考えられる。浦島太郎ようになってしまった八島太郎自身の思いが先行し過ぎたのではないか。初期の絵本作品においては、日本の景色や生活、風物を背景に子どもを描く中で、生命力にあふれた屈託のない子どもの姿や、からすたろうのように孤独に耐えながらも、人が注目しないささいなものに興味を抱き、豊かな知識や技能を蓄える姿が描かれていた。モモを主人公にした作品群では場所はモモ自身の住む町となるが、幼い子どもの中の待ち望む気持ちや自立、弱い生命への慈しみと生命力が描かれる。子どもの人間性あるいは尊厳というものが主題と言える。「いなか侍」であった八島太郎に女性蔑視の態度があったことは否めない。しかし、大胆な構図、輪郭を伴わない三原色と黒による美しい色の重なり、ストーリーを通して八島の人間性への真摯な態度、誠実さというものが彼の絵本から伝わってくるのである。子ども達の手伝いをしたいと願った八島は、彼が伝えたいテーマは「地球は美しい。生きるってすばらしい。人間を信じよう」だと言い切っている(Yashima 1955, 24)。

他方で、メイ・マッシーが移民のアーティストを多く採用した背景には、おそらくビジネスパーソンとしての方針もあっただろうが、この時代、成功させるのは難しかっただろう。しかし、彼女が外国に関心があったのは、美しくエキゾチックな絵を見せるためではなく、若いアメリカ人の心を広げるためであり、異なる文化や考え方への尊敬と関心を育むためであった。尊厳をもった子どもの人間性という普遍的なテーマをもつ八島作品は、編集者の方針と合致するものであっただろう。

マッシーは移民の画家たちについて次のように述べている。

戦後、戦前、戦時中の抑圧により、青年時代を過ごした愛する祖国を離れてやってきた画家が大勢いる。おそらくノスタルジーをもって距離を置いて祖国を見ることができたため、祖国に留まっていたよりもよい子どもの本を作ることができている。この国で彼らは、

自分を表現する手段を見出し、この期間に何百という絵本や物語を作り、風景や習慣は違っても、世界のどこへ行っても子どもは同じだと、そして世界のあらゆるところに美しさと善良さはあるのだと生き生きと証している。そして、第二、第三世代のアメリカ人となった人々が成長する過程で自分たちの祖先の文化を吸収し、それゆえに意識的にしろ無意識にしろ、子ども達に描いてみせるアメリカ生活の諸相を豊かにしてくれた。(中略)今世紀半ばまでにアメリカの子ども文学は世界でもっとも国際的感覚をもつ文学になったと言っても差し支えないだろう。(Massee 48)

日本的な美意識と子どもの人間性への信頼をもつ八島太郎も、子どもの文学の多様性に貢献した一人であると言える。

3. エリザベス・グレイ・ヴァイニングについて

エリザベス・ジャネット・ゴードン・グレイ(Elizabeth Janet Gordon Gray, 後にMorgan Viningと結婚し、Elizabeth Gray Viningに。筆名はエリザベス・ジャネット・グレイ、日本では「ヴァイニング夫人」と呼ばれた)は1902年、フィラデルフィアのスコットランド系の家庭に19歳上の長女に次ぐ次女として生まれた。⁷⁾母方はフレンド派(クエーカー)のクリスチャンであり、やがて彼女もクエーカー教徒になる。子どもの頃から本を読むのも、物語を書くのも好きだった。大学は名門女子大学ブリンマー大学(Bryn Mawr College)に進んだ。この大学のモットーは“Veritatem Dilexi”(ラテン語で「私は真理を愛する」の意)であるが、「学問の目的、基礎は、すべて真理の探究にある。ここに永遠の価値があるという確信を得、完全に到達できるものではないが、それに向かって常に手を伸ばしていくこと、すなわち探究そのものに価値があり、それはある意味気高いことなのだ」と学んだ。「真理の探究こそが教育、物を書くこと、そして人生そのものの基盤である」という考えは、ヴァイニングの生涯を貫く思想であった(Vining 61-62)。彼女が大学を卒業した頃、姉のヴァイオレットは図書館員だった。「外国から来た移民の子ども達は賢くて、知識と生きることに飢えていた。(中略)彼らが欲しかったのは、友であり、話しを聞いてくれる人だった。彼らは彼女(ヴァイオレット)の周りに集まり、彼らの旧大陸での経験を話したり、新大陸での希望や困難や、成功を話した」(69)という記述は、その時代、良い図書館が移民の子ども達にとって避難所の役割を果たしていたことを示している。

ヴァイニングとマッシーとの出会いは1925年春である。前年秋にヴァイニングが自作の物語(*Meredith's Ann*)をマッシーの勤めるダブルデイ社に送ったことがきっかけだった。この時、エリザベス23歳、マッシー43歳である。マッシーの美しさや静かでありながら自信のある物腰と洗練された飾り気のなさに惹きつけられもしたし怖れを抱いたと、ヴァイニングは第一印象を述懐している(76)。後年マッシーの方も、若くて自信に満ちたヴァイニングを怖れていたと伝えたい。種々話をした後でマッシーは送られた原稿に対して助言をし、改善されたら一年後にダブルデイから出版すると約束した。⁸⁾ニューヨーク公共図書館員のアン・キャロル・ムーアは、10代の女の子に訴える創作があらゆるフィクションの中でも最も難しいと考えていた。そして、本物の女の子達と同じくらいおもしろい、多様性と驚きがつまった『若草物語』(1908)のような著作を望んでいた(Moore 254)。しかし、この時代の少女小説のジャンルでは、女の子が自分自身の人生を自由に生きようとする作品が少なく、概して「内省的、感傷的、道徳的、教訓主義的である」として批判していた(金山2014, 80)。1930年代に入って状況は改善していくが、ヴァイニングの書く物語は、このような少女小説のパターンを破ってみせたと言えよう。

図書館司書の資格を取ったヴァイニングの初任地はノースカロライナ大学チャペルヒル校の図書館だったが、そこで夫となるモーガン(Morgan Vining)と出会う。エリザベスがこの南部出身の男性に夢中であったことは、自伝から伝わってくる。やがてニューヨークへ移り住んだヴァイニングは、学校図書館研究所(The School Library Laboratory)で働くことになり、そこで当時の児童書出版や児童図書館の立役者とも言える出版者や図書館員の面々に出会う。⁹⁾このサークルをヴァイニングは以下のように振り返る。「それは温かい世界で、主に子どもの本とはどのようなものになり得るかというヴィジョンをもった献身的な女性たちで構成されていました。彼女たちは、子どもと本へのリスペクトを持っていて、若い読者のために最高の文と絵と本作りを行いたいと思っていたのです」(127)。当時子どもの文学は大人の文学よりも数段下に見られていたため、ヴァイニングは書くことへエネルギーと情熱を傾けるようになる。しかし、1933年10月1日悲劇が襲う。自動車事故で夫が頭蓋骨骨折で即死、エリザベス自身も大怪我で6週間寝たきりとなる。医師には「彼のために自分の人生を生き続けなければ」と言われた。この時期を回想してヴァイニングは、「美しさと勇氣だけで

は足りないとわかった。人生の意味というものを、私が生きていけるような現実感と強さをもった哲学を、あてもなく手探りして探し始めた」と述べている(136)。この寝たきりの時期に、マッシーはヴァイニングを励ますために本を贈っており、そこには、ヴァイキング社で最初にマッシーが出した本の一つ、ヴァイニングの*Jane Hope* (1933未邦訳)も含まれていた。その本の献辞には「彼へ」と書かれ、ジャケットカバーにはチャペルヒルのキャンパスのギンバイカが色鮮やかに描かれていた。ヴァイニングは、「送られた本は読まなかった」と言うが、この編集者からの無言のメッセージ「あなたも作家です。あなたの人生は終わっていないのだから、また書ける日がくるでしょう」(136) —は受け取った。本が読めるようになると、彼女はこの事故の意味を探して、再び執筆に向った。クエーカーの集会からも心の平安と力をもらい、やがて彼女は「悲しみとは克服するものでもそれから逃げるものでもなく、ともに生きるものだ」と知ったと言う(137-145)。

マッシーは、初めて出会った春の日のランチ以降、作家としてのエリザベスを励まし続ける。それはマッシーからの手紙からも窺える。手紙の内容は、エリザベス書いた原稿の内容に関することや改善への提案や質問(決してこうするようには言わない)、印税や支払いのこと、共通の友人のこと、遊びの誘いなどである。マッシーからの31通、ヴァイニングからの6通がカンザス州にあるエンポーリア州立大学ウィリアム・アレン・ホワイト図書館の「メイ・マッシー・コレクション」に所蔵されている。マッシーからは絶えずエリザベスを励まし、その気持ちを尊重するような手紙が送られている。第二次世界大戦中にヴァイニングは*Adam of the Road* (Viking, 1943『旅の子アダム』トッパン 1948)でニューベリー賞を受賞するが、『旅の子アダム』の挿絵を描いたロバート・ローソン(Robert Lawson)の言葉をマッシーは手紙に引用している。ローソンは、エリザベスの作品が周到な調査に基づき、自然でリアルに書かれていることに賛辞を述べた後で、「私は彼女の若さ、美しさ、それから全体的な魅力にすっかり面食らってしまって、彼女が作家であるということ、しかもとても学問のある人であるという事実をまだ受け止めきれずにいます。彼女が偉大な仕事をしているということ、そして挿絵で私も一緒にその仕事をしたいと思っていることを知ってもらいたいのです」(1941年10月16日)と書いたと伝えている。¹⁰⁾

ヴァイニングには、他にも戦時中に書かれた*Sandy* (1945,『サンディ』朝日新聞社1947)という作品がある。この物語はサンディという大学一

年生の主人公が亡母の故郷で叔母と過ごす一夏を描いたものである。物語では、高校時代の後輩との遊びや彼らと企画したダンスの集い、ホテルのレストランでのアルバイトや喧嘩、ロマンスも語られる。サンディは真夜中に一人でパンクを直してしまうような女の子だが、将来を心配して彼女のためにレールを敷こうとする大人たちの助言に大いに悩まされる。物語の後半では、サンディが自分で自分の将来を決めることを学ぶ過程が描かれる。さらに、人の無責任な言葉を鵜呑みにして傷つき一番信頼したい人を疑ったり、自分の尺度で人を測り自分の言い分を通す傾向のあったサンディが、人との軋轢を通して、さらには、「違う考えをもっている人と争ったり、その人に屈服することなく仲良くやっていくことを学ぶことが大事だ」(212)と話す年長者の会話を小耳にはさんで、自分自身の人との関わり方を顧みる。サンディは、考えの違う人との間にお互いが満足できる第三の道を見出すことができれば、戦争もなくなるのにと考え(214)、真に自分がやりたいと思うことの準備をするために進路を変更する。そのような主人公をマッシーは、18歳ではなく、完璧な17歳に見えると書いており(1944年10月2日)、最終的にサンディは17歳と設定されている。マッシーの助言をヴァイニングが受け入れた結果であろう。人とぶつかりながらも成長し、自分の将来を自分で決めようとする女の子像は、ムーアが不満に思っていた少女小説のパターンを破るものである。すがすがしささえ感じられる主人公をマッシーも大いに気に入っていた(1943年8月12日)。

戦後まもなく、ヴァイニングは日本の皇太子の家庭教師の仕事について打診を受け、来日することになる。1946年から1950年までの4年間日本でこの任務に就くのだが、最終的にこの話を受ける決断をした時の思いを以下のように記している。

一方私は、平和と和解のために献身したいという願いも強かった。日本が新憲法において戦争を放棄したことは、私にはきわめて意義深いことに思われた。平和のために一切を賭けようとしている日本人々にはげましを与え、それからまた、永続的な平和の基礎となるべき自由と正義と善意との理想を、成長期にある皇太子殿下に示す絶好の機会が、いま目の前にあるのだ。一週間経ってようやく私は日記にこう書きつけることができた―「私はこの問題を神の手にゆだねる気持になった。」(ヴァイニング 2015, 27)

日本に到着し挨拶に行ったヴァイニングは、「皇太子殿下のために、もっと広い世界の見える窓を開いていただきたい」との宮内庁長官松平子爵の言葉で迎えられた(12)。

ヴァイニングが日本で見聞きした戦後の庶民生活を描いた*The Cheerful Heart* (1959『陽気な心』、邦訳は『トミ』トレヴィル 1989)は、通訳として、またよき友としてヴァイニングを支え続けた高橋たねに捧げられている。姉を戦争で失くし、シベリアに抑留された兄の無事を祈る小学6年生の女の子玉木トミが、時に悩みながらも明るい心をもって家族を励まして生きる姿を描いている。この少女も自分で考えて行動し、自分の新しい部屋を復員した兄に譲ることを決める。1958年4月の時点で、マッシーはその本を楽しみにしている旨を書いている。支払いの契約についてヴァイニングが同意できなかった点があったのか、『『陽気な心』を書いているあなた自身にも陽気な心をもって欲しい』と書き、気に入らない契約なら破棄するので、「完全にあなたが満足のいくまで契約は待ちましょう」と気遣っている(1958年12月2日)。

1959年3月11日には文章完成を祝い、この手紙と3月24日の手紙で『陽気な心』の挿絵画家に八島太郎を提案している。『からすたろう』や『あまがさ』が出た後の話である。「モモ・ヤシマは9歳だから『陽気な心』のモデルとしては完璧ですし、きっと彼はやりたがると思います」とマッシーは書いている(1959年3月24日)。

しかし、八島とのコラボレーションは実現しなかった。代わりにミズムラカズエが描いている。ヤグシュは「ヴァイニングはミズムラを選んだ」と述べるに留めているが(272)、八島が辞退したのか、ヴァイニングが八島とのコラボの提案を受けなかったのかは分からない。二人の人生に「軍国主義」と「天皇制」が大きな影響を及ぼしたことを考えれば、どちらかが自重したのかもしれない。マッシーがそのような日本独特の事情を理解できなかったとしても不思議ではない。ミズムラの挿絵も決して悪くないが、実現していれば、『道草いっぱい』のようなユーモラスなタッチの挿絵が、この本の魅力を増しただろう。こうしてマッシーと関わりの深い二人の人生が交差することはなかったが、二人とも子どもへの愛情だけでなく、子どもが尊厳をもった個人として自立することの大切さと励ましを表現していったのである。

おわりに

画家自身の子どもの人間性への共感と故郷への郷愁を特徴とした八島

作品は、マッシーによって世に出されたことにより、アメリカで広く受け入れられ、その後日本にも知られるようになった。ヴァイニングは、皇室の子ども達とのお楽しみの時間にワンダ・ガアグの*Millions of Cats* (1928, 『100まんびきのねこ』福音館書店 1961)を使い、皇太子との授業では、ドーレア夫妻の*Abraham Lincoln* (1939未邦訳)や、ジョン・バニヤンの作品をメアリ・ゴドルフィンが再話し、ロバート・ローソンが挿絵を描いた*Pilgrim's Progress* (1939, 『天の都をさして』すぐ書房 1980)やローソンの*They were Strong and Good* (1940未邦訳)を教材の一部に使っている(ヴァイニング 1989, 2015)。このようにマッシーと縁のある画家たちやアメリカ黄金時代の絵本が日本の皇室での教育にいち早く取り入れられていたことを考えるのは楽しいことである。マッシーは、自分達の本作りは民主主義の社会であるからこそ可能なものであり、何百万もの子ども達とその本のなかのなにがしかの真実や美しさに触れることができるのだと述べている。そしてその子ども達のどの子も一人ひとり他人とは違った趣味や望み、選ぶ権利をもち、自分の好きな道を見つけてその道を進む自由がある。本を読むことで、自分自身を知り、他者を知っていくのだと考えていた。¹¹⁾自分の国とは異なる世界とそこへ住む人々へと子どもの心を広げることには尽力し、子どもの多様性を認め、「どの子にもふさわしい本をふさわしい時期に」を信条としていたメイ・マッシーの願いは、軍国主義に苦しみ抵抗した八島と戦後日本の民主化において重要な任務に就いたヴァイニングという、日本にゆかりのある画家と作家の作品に具体化されたとと言える。

註

- ¹⁾ 八島太郎の略歴に関しては、いわさきちひろ絵本美術館編『特別展 八島太郎の世界』いわさきちひろ絵本美術館、1996、および宇佐美承『さよなら日本 絵本作家・八島太郎と光子の亡命』晶文社、1981を参照した。
- ²⁾ 「八島太郎の絵本考[2] —武市八十雄(至光社代表・絵本制作者)に聞く」いわさきちひろ絵本美術館『特別展 八島太郎の世界』、16。
- ³⁾ この本で彼はコールデコット賞次席を獲得し、次に出した本*Finders Keepers* (Harcourt, 1951 『ナップとウィンクル：みつけたほねはだれのもの』アリス館牧新社1976、『みつけたものとさわたもの』童話館1997)はコールデコット賞を受賞する。
- ⁴⁾ 磯長先生のことを八島は、「子どもをベラボウに愛してくれた先生でねえ」と述懐している
- ⁵⁾ *Taro Yashima's Golden Village*, produced & directed by Glenn Johnson,

1976.

- 6) 『日曜美術館』「故郷は遠きにありて～絵本画家八島太郎～」2023年8月27日初回放送
- 7) ヴァイニングの略歴は、Elizabeth Gray Vining, *Quiet Pilgrimage*, Lippincott Company, 1970を主な情報源とし、日本での生活については、主にヴァイニング『天皇陛下の窓』文芸春秋、2015を参照した。
- 8) マッシーからヴァイニングへの助言や二人の交流については、金山(2017、2018、2020)を参照されたい。
- 9) マッシーの他に、アリス・ダルグリーシュ(大学教員、スクリプナー社編集者)、フレデリック・メルチャー(『パブリシャーズ・ウィークリー』発行者、ニューベリー賞創設者)、アン・キャロル・ムーア(ニューヨーク公共図書館員)、バーサ・マホーニー・ミラー(『ホーンブック』誌発行者)らである。
- 10) これらの手紙は、エンポーリア州立大学のウィリアム・アレン・ホワイ特図書館The May Masee Collectionに所蔵されている。マッシーとヴァイニングの手紙の往復はマッシーの死の1か月前まで続いた。1966年11月20日の手紙でマッシーは、コロンビア大学のインタビューを受けるために、ヴァイニングが日本の皇太子の家庭教師に選ばれた理由など事実確認をしている。ヴァイニングは11月23日の返信で、皇太子の結婚式のことや美智子妃から二人の可愛い男の子の写真が送られたことなども書いている。このインタビューからは、マッシーがヴァイニングを生涯の誇りとしており、信頼していたことが窺われる。実際、マッシーの伝記的な記事の多くを書いたのはヴァイニングである。
- 11) May Masee, “Children’s Books in a Democracy,” Typescript. The May Masee Collection.

引用文献

- Gray, Elizabeth Janet, *Sandy*, Viking Press, 1945.
- , *The Cheerful Heart*, Viking Press, 1959.
- Vining, Elizabeth Gray, *Quiet Pilgrimage*, Lippincott Company, 1970.
- , “May Masee; Who was She?” *The May Masee Collection: Creative Publishing for Children 1923-1963 A Checklist*, ed. by George V. Hodowanec, Emporia State University, Kansas, 1979.
- , “Letters to May Masee,” The May Masee Collection, William Allen White Library, Emporia State University.
- グレイ、エリザベス・ジャネット『トミ The Cheerful Heart』黒井健画、HEART訳、トレヴィル発行、1989.
- ヴァイニング、エリザベス・グレイ『天皇とわたし』秦剛平/和子訳、山本書店、1989。
(*Quiet Pilgrimage*より日本に関する箇所を抜粋して翻訳)
- , 『皇太子の窓』文芸春秋、2015。(1989年刊行の新装版『皇太子の窓』(初版1953)を底本としたもの)
- Yashima, Taro, *Crow Boy*, Viking, 1955.
- , “On Making a Book for a Child,” *Horn Book* 31.1, February 1955.
- 八島太郎「桃子三歳記(4)」『母の友』福音館書店、1961年2月、58-63.
- , 「児童絵本とは何か<3>」『ひろば』56号、至光社、1972.
- , 「児童絵本とは何か<4>」『ひろば』57号、至光社、1973.

- , 「児童絵本とは何か<8>」『ひろば』61号、至光社、1974.
- Bader, Barbara, *American Picturebooks from Noah's Ark to the Beast Within*, Macmillan Publishing Co., Inc. New York, Collier Macmillan Publishers, London, 1976.
- Hopkins, Lee Bennett, *Books are by People*, Citation Press, 1969.
- Massee, May, "Children's Books in a Democracy," Typescript, The May Massee Collection, William Allen White Library, Emporia State University.
- , "Letters to Elizabeth Vining," The May Massee Collection, William Allen White Library, Emporia State University.
- Moore, Anne Carroll, *The Three Owls*, Macmillan Company, 1925.
- Mordvinoff, Nicholas, "Artist's Choice; *Crow Boy* by Yashima" *Horn Book* 32.6, December 1956.
- Yagusch, Sybille A., *Japan and American Children's Books*, Rutgers University Press, 2021.
- 石井桃子『石井桃子集6 児童文学の旅』岩波書店、1981.
- いわさきちひろ絵本美術館『特別展 八島太郎の世界 生命の鼓動が聞こえる—アメリカに生きた日本人絵本作家の軌跡』会期1996年2月10日～4月14日
- 宇佐美承『さよなら日本 絵本作家八島太郎と光子の亡命』晶文社、1981.
- 金山愛子「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（2）～アン・キャロル・ムーア②～」『敬和学園大学研究紀要』第23号、2014年.
- , 「アメリカ児童図書館黎明期に子どもの文学普及に貢献した人々（5）（6）（7）～メイ・マッシー①②③～」『敬和学園大学研究紀要』第26、27、29号、2017、2018、2020年.
- 瀬田貞二『絵本論—瀬田貞二の子どもの本評論集—』福音館書店、1985.
- 中沢啓作「遥かなるプロフィール 八島太郎こと岩松淳について」『月間絵本』7（7）、すばる書房、1979.4. 34-35.
- 村上由見子「凝視するエネルギー 八島太郎の絵本を凝視する試み」『月間絵本』7（7）、すばる書房、1979.4. 55-60.